ひとつぶ
ラノベ
#10
ステキに異文化コミュニケーション
著：藍澤たすく
イラスト：かもめ遊羽

「＊％＆§∫∫（＃？）」
聞き慣れぬ言葉の響きに、公園のベンチに座っていた小原伊織は、読みかけの文庫本から目をあげた。
「⁉」
そこには異国の少女の顔があった。
しかもどアップで。
その距離わずかに10センチほど。
「＃★＆％♂∴？」
伊織の顔を覗き込むようにして、少女は困ったような顔で話しかけてくる。
ふんわりと漂ってくる甘い香り。
極上の金糸を束ねたような美しい輝きを放つブロンド。
その瞳の碧は見る者を吸いこむような魅惑的な光を宿していた。
何より彼女いない歴15年を誇る伊織にとって目の毒なのは、かがみこんだワンピースの胸元からちらちらと覗くふたつの穏やかな膨らみだった。
いわゆる微乳＆美乳である。
「え？　あの、あの、なに？　なに？」
パニくった伊織はどうすればいいのか判らず、あわあわとベンチを横移動した。

しかしなぜか少女はそれにぴったりとついてくる。
「〓＃★△＆■？」
「えーと……えーと……あ！」
伊織は学生鞄の中からスケッチブックとＢ４の鉛筆を取り出した。
「んーと……これで、こうして……はい、どう？」
伊織が少女に差し出したスケッチブックには泣きそうな顔できょろきょろと辺りを見回す少女のイラストが描いてあった。漫研の部長を務めるだけあってなかなか達者なイラストだ。
伊織としては「迷子なの？」と問いかけているつもりだった。
スケッチブックを見た少女は我が意を得たとばかりに、ウンウンとオーバーアクションで頷いた。それから人差し指をあごに当て、
「アギハカ、アキバラ、ババラ……」
何やら呪文のようなことを呟き始めた。
「秋葉原？」
「！」
少女はまたウンウンと嬉しそうに頷いた。
そのたびに艶やかなブロンドがふわふわと風に舞ってきらめく。
「秋葉原ならここからちょっと歩けば着くけど……案内しようか？」

伊織は男の子が女の子の手を引いて案内しているイラストを描いた。
少女はまたウンウンと頷いて……ぎゅっと伊織の手を握った。
「！」
突然のことに伊織は耳まで真っ赤になった。
少女にしてみれば、イラストに描いてある通りにしただけなのだが、伊織にとっては驚天動地の事態である。
（女の子に手をつながれた……女の子に手をつながれた……しかもこんな可愛い娘に……！）
動悸がオーバードライブして口から飛び出しそうになる心臓を、伊織はなんとか押さえつけた。
一方、少女の瞳には喜びと期待がこれでもかというぐらい詰め込まれてキラキラと光っている。彼女が子犬だったら間違いなく尻尾をちぎれんばかりに振って、庭を駆け回っていることだろう。
「こ、ここ、こっち……」
できるだけ変な意識をしないよう、自分は道案内をしているだけなのだ、と己に言い聞かせる伊織だが、右の手のひらから伝わってくる柔らかい感触が彼の心をとらえて離さない。うっかりするとそのまま右手から体全体が溶けてしまいそうな錯覚にさえ陥る。
「そ、そうだ、きみ、名前は？」

伊織はできるだけ自然に手を離し、少女の胸に空白の名札を描いたイラストを示した。
「クロエ！」
少女……クロエ……は、はっきりとした口調でそう名乗った。
クロエか……なんかちょっと日本語っぽい響きで素敵だな、と伊織は思う。
「@0&%$？」
クロエがイラストの名札と伊織を交互に指さした。今度は伊織が名乗る番のようだ。
「僕の名前？　僕は伊織。小原伊織。よく女の子みたいな名前だって言われるんでちょっと恥ずかしいんだけど……」
「オバ……ラ、イオ、リ……？」
「そう」
伊織はにっこりと少女に微笑んだ。
「オバ、ラ、イオリ、オバ、ラ……」
少女は噛みしめるように、大切そうに伊織の名前を繰り返す。やがて。
「オッパイ！」
「ぶっ!?」
「オッパイ、オリ！　オッパイ、オリ！」
クロエが満面の笑みで伊織の両手を握ってぶんぶんと振る。

どうやら伊織の名前には彼女が発音しづらい音が含まれていたようだ。
かといって公衆の面前でのおっぱい連呼はさすがにまずい。
「あのね、おっぱいじゃなくて、小原なの。オ・バ・ラ！」
「オッ、パ、イ？」
クロエは不思議そうな顔をして首を傾げる。
「ああ、もお～！」
伊織はスケッチブックに鉛筆を走らせる。
「∇∞＆#♀♂！」
伊織の描いた絵を見て、今度はクロエが真っ赤になった。
それこそ耳まで真っ赤で、まるで熟れたミニトマトのようだ。
そこに描かれていたのはメイド服の女性と伊織本人。
そしてメイドさんの胸は服からこぼれそうなほど大きい。
伊織からその巨乳へと矢印が引っ張ってあって「×」と描かれている。
伊織としては「僕はおっぱいじゃないよ」というつもりで描いたのだが、クロエには別の意味で伝わってしまったようだ。
「あ、そ、そうか！　ごめん！　そういう意味じゃなくて……」
伊織は慌てて弁解しようとするが、言葉も絵も通用しないとなるとまったく手が出ない。そ

の時。
「!?」
クロエは伊織から鉛筆をひったくると、メイドさんの上に何やら書き込んだ。
「キャロット……キッシュ？」
普通に英語だったので、伊織も普通にそれを読めた。
クロエはそれこそ首がちぎれんばかりに激しく頷いた。
喜怒哀楽が本当にはっきりとコロコロ切り替わる娘だ。
どうやらクロエはおっぱいではなく、伊織の描いたメイド服の方に食いついたようだ。
そのメイド服は秋葉原にある有名なメイド喫茶の制服だった。
そしてその店は伊織もよく知っている。なぜなら……。
「あら～めずらしい～いおりんがここに来るなんて～！　お姉ちゃん嬉しいわ～♥」
「は、離せ！　仕事中だろ姉ちゃん！」
「おっと、そうだった。では、こほん……。お帰りなさいませ、ご主人様！　ごはんにする？　お風呂にする？　それともあたしと一緒にお風呂でごはん食べる？」
「おかしいだろ、その三択！」
伊織の姉である小原香織がその「メイド喫茶　キャロット・キッシュ」のオーナー兼メイド

長だからなのであった！

香織は他の客をガン無視して伊織にむにゅむにゅと頬ずりする。

（くっ……実弟と言えど我らの香織様をそのように独占するなど……万死に値する……イツカコロス！）

（でもいおりんを可愛がってるときのかおりん、一番輝いてるよね）

「よく見れば、はあはあ、いおりんも可愛いじゃないか！　はあはあ、ここはぜひ男の娘になって姉妹丼を……！！」

（落ち着け、村松！　お前だけ思考が声に出てるぞ！）

常連客たちの心の怨嗟と何やら危険な視線が香織と伊織を取り囲む。

これがここに伊織がめったに寄りつかない明白な理由であった。

「もう、どういう風の吹き回しよ～いつもアキバに来ても絶対ここにだけは寄ってくれなかったのにぃ～ん。いおりんもやっとメイドの良さに目覚めたのぉ～ん？　って……あら？」

そこまで言って、香織は伊織の後ろに、目をきらきらさせ、むふーむふーと鼻息も荒い異国の美少女がいることに気がついた。

「なになにいおりん⁉　これ彼女⁉　いおりんの彼女⁉　超可愛いじゃなぁ～い！」

「ち、違うよ！　クロエは……彼女は道に迷ってたから連れてきただけだよ」

「クロエ？　……はぁーん、もう呼び捨てにする仲ってことね？」

「だから違うって！」

「＄#§☆％＆ー！！」

突然クロエが歓喜の声をあげて香織に飛びついた。

「＄#§☆％＆ー⁉　＄#§☆％＆ー⁉」

「え？　何いおりん、この娘、百合系なの？」

香織に強烈なハグをかまし、そのほっぺたにチュッチュッ、チュッチュッと口づけをするクロエを呆然と眺める伊織。

その時、クロエの持っているポーチから何かがこぼれ落ちた。

香織のブロマイドだった。

そう、香織はこれまで2冊の写真集を出版し、その筋のサブカル雑誌の表紙を幾度ともなく飾ったことのあるメイドル（※メイドのアイドル）でもあるのだった。

「なに、かっわいーー！　クロエちゃん、あたしのファンなのー⁉」

「#＄％＆＄～♥」

クロエは香織にハグをし返されると、恍惚の表情を浮かべそのまま溶けてしまいそうほどふにゃふにゃになる。どうやら本当にクロエは香織目当てでここまでやって来たらしい。

「そうだ、せっかくだからクロエちゃん、うちのお店もっとしっかり体験してく？」
いいこと思いついた！　といういたずらっ子の顔で香織がそんなことをさらりと言う。
その瞬間、香織の瞳に妖しい光が宿ったことを伊織は見逃さなかったが、時すでに遅しだった。

「きゃーっ！　やっぱり可愛い～クロエちゃん超似合うじゃない～！」
メイド服に身を包んだクロエの周りを香織はぴょんぴょんと跳ね回る。
クロエは恥ずかしそうにもじもじしているが、まんざらでもなさそうな表情を浮かべていた。
（うおおお、天使ちゃんーキター！！　金髪ブロンド碧眼美少女！　まさに神が創りたもうた究極美！）
（貴様かおりんを前によくもそんな不遜なことを言ああああ俺もクロエちゃんに踏みつけられて口汚く罵られたいーーーー！）
「俺なんかあのニーソを1週間ぐらい穿き続けてもらってからくんかくんかしたいんだぜ！」
（だから村松声出てるって！）
店内が異様な熱狂と興奮に包まれる。もう清々しいほどにHENTAIばかりだった。
「ちょっと姉ちゃん……」
「ん？　いおりんの方も準備できた？」

バックヤードのカーテンの陰から伊織が睨むように顔を覗かせる。
気のせいか幾分頬が紅潮しているようだ。
「そんな恥ずかしがらないで、それ、ばーっと！」
「あっ、やめっ!?」
香織が勢いよくカーテンをめくると……そこにはクロエと同じくメイド服に身を包んだ伊織の姿があった。キャロットキッシュの精鋭メイドが10人がかりで完璧に仕上げただけあって、伊織は香織に瓜二つの完璧美少女メイドルになっていた。
（おっほ……こ、これは……）
（かおりんが二人……いや、男の娘だけに宿る独特のオーラの分だけ、いおりんの方が輝いている……）
「奇蹟だ……俺は奇蹟の目撃者となったのだ……！」
（大変だ！　村松が鼻血の出血多量で倒れた！）
衆オタ環視に晒された伊織が恥ずかしそうにスカートの裾をつかんでもじもじする。
その仕草はまさに男の娘の中の男の娘だった。
「きゃー可愛い最高ぺろぺろしたいもう超萌えー！」
「ちょっ、姉ちゃんやめっ……」
香織が伊織をお姫様抱っこして本当にぺろぺろしようとする。

「モエ？」
二人の様子を見てクロエが不思議そうに小首を傾げる。
「そうよ、萌えよ萌え！　いおりん大好きってこと！」
「！」
香織が両手でハートを作りながらそう説明すると、クロエは天啓を受けたかのごとく、ハッとした表情になった。そして。
「モエー！」
「わわわ⁉」
叫ぶが早いか、クロエも伊織にしがみつく。
店内に広がる重低音のオタクの「おおお～～～～」という地鳴りのような声。
「よぉーっし！　せっかくだからここでいおりんとクロエちゃんのデビューイベントやっちゃおうか！」
「え？　姉ちゃん、何言って……」
伊織の抵抗も虚しく、クロエと伊織はお揃いの格好で店内中央にあるイベントステージへとあげられる。
と、同時に極彩色のライトと、大音量の曲がスタート。完璧なタイミング。無駄なところで連携ばっちりのスタッフ達だった。

「わわわわ……ごめん、クロエ！　早くここから逃げ……」
「モエー！！」
「「「うおおおー！」」」
突然クロエが伊織の手を握りしめて高々と掲げた。
同時に巻き起こるギャラリーからの黄色い……いや、腹の底を震わすような重低音の声援。
だめだ、この娘、完全に空気に呑まれてる……‼
「モエー⁉」
「萌えー！」
「モエー⁉」
「萌え萌えーーー！！！！」
クロエのコールに狂喜して応えるオタク達。なんなんだこの異空間。
だが気がつくといつの間にか伊織もクロエと同じステップを踏みながら、踊り、歌い、ポーズを決めていた。集団心理の持つ狂気とはげに恐ろしいものなのだ。
巻き起こる大歓声。それに応えるクロエ（と伊織）。さらに増幅される大歓声。
ここまでくるともう悪魔に支配されている空間と言っても過言ではなかった。
もちろん悪魔＝香織なわけであるが……。
これがのちに伝説として語り継がれるキャロットキッシュの一番熱い日だったのだ……。

「疲れた……」

なんとか自宅に帰りついた伊織はばったりと居間のソファに倒れ込んだ。

あの後も熱狂の宴は続いたが、正直途中から途切れ途切れにしか記憶がない。

これはきっと伊織の本能にある防衛機構が働いて、彼の自己同一性を脅かす数々の経験を抹消したためだろう。

微かに脳裏によぎるのは香織の天使のように悪魔的な笑顔。

あれは一体いつのことだったか……。

伊織は悪夢を振り払うようにぶんぶんと頭を振る。

まあ、クロエも楽しんでくれたようだし、その意味では良かったかな……。

他のことはもう全て忘れよう。それがいい。それに決めた。

そうしないと生きていけない気がする……！

伊織は冷蔵庫からミネラルウォーターのペットボトルをとると、何気なく居間のテレビをつけた。

「ぶーっ⁉」

◆

伊織は飲み始めたミネラルウォーターを盛大に吹いた。

なぜならそこに映っていたのは……クロエその人だったからだ！

だが画面に映る彼女と、伊織が知っている彼女には大きな違いがあった。

清楚なドレスに身を包み、高貴な笑みを浮かべながら、柔らかい物腰で丁寧に記者団に応える姿は、伊織が知っている彼女とはまったくの別人だったからだ。

画面の右上には「アンドレイアス公国クロエ姫記者会見」とある。記者の質問を総合すると、クロエは国賓として宮中晩餐会に招かれていて、今日帰国の途につくらしい。

……え、まじで⁉

伊織は何度となく目をこすり、画面を凝視した。やっぱり、クロエだ。間違いない。

じゃあ、彼女はわざわざお忍びで秋葉原に……？

やがて記者会見も終了の時間となり、最後の質問として日本に滞在している間もっとも印象に残ったのはなんですか？　という締めくくりとしては実に凡庸な質問が出た。

通訳から質問を聞き終わると、クロエはにっこり笑ってこう言った。

「オッパイ、モエモエ、デス」

それは日本がアンドレイアス公国との外交方針を一変させるだけのインパクトを持った、強烈な一言だった。

おしまい